

新吉はあの狂人の仕業に違ひないと思つた。

彼も自分のやうな狂人の目を見たので、眠る事が出来なかつたのだ。

冷い蔑視が藁に燃え移るマッチの役目を果したのもあつたらうか。

嫌疑は奈邊に及ぶべきか測り知れない。

それにしても物音は沈まり、田舎の自然の静寂の上へ、雪がしん／＼と降り重つてゐた。

『俺は何處へも行かない、此處に居た。』

火事は本當にあつたらうか。

新吉は俺の知らぬ間に分裂した二重人格か、サブリストか、大それた仕事を仕出来したものであつた。俺は熟睡出来なかつたのは勿論だ。されば出發しなけりやならぬ』

朝になると女生徒が四人宛炊事をやりに来るので、夜の明け切らない中に新吉は身仕度した。

加奈陀土産の虎の毛のやうなオーバーを尾上に借りて、それを着物の上に着て、帯を引き裂いてなつた綱で、紙函をガラメに縛り、脊糞みたいに肩に掛けて、尾上の焼いてくれた餅を、オーバーのポケットに紙に包んで藏ひ、轉んでも大丈夫にして出掛けた。